

古墳文化共鳴の風土

● 赤塚次郎

弥生時代からの伝統的地域社会が、いかなる要因で前方後円墳や前方後方墳を採用し、造営していったのかという点を、特に地域社会の側に立脚して考えてみたい。前方後円（後方）墳とは、本来が弥生社会が生み出した地域型墳丘墓から出発している点を確認し、その大きさや形、墳丘テクスチャーなどはすべてそれぞれの地域社会がほぼ独自に決めてきたものであり、かつ所有しているものであると考える。したがって前方後円（後方）墳はヤマトから一元的に拡散したのではなく、すでにそれ以前に普遍化していた地域型墳丘墓から、その地域が時間をかけ選択し収斂した結果にすぎないものである。そこに王権のデザインへの共鳴現象が関与し、民族的な問題を止揚する方向性が生み出される。

1 はじめに

弥生時代後期を中心として伊勢湾岸地域に、「東海系」と総括される独自の文化が存在する。そしてこの文化の重要性は、古墳時代の幕開けそのものに大きく関わっていると想定できる点にある。その具体的な資料としては、東海系土器・木製品・人面文・墳丘墓（前方後方形）などを加えた東海系文化そのものの拡散現象として把握できる。かつて東海系のトレースと呼んだ現象である（赤塚 1992）。その具体的な現象は大きく西暦二世紀末葉から三世紀前葉の第一次拡散期と、西暦三世紀中頃から後葉を中心とした第二次拡散期に区分できる。前者は、主に東日本に広がりをもち、東海・北陸・中部高地から関東各地の地域社会に構造的な社会変革を起こした、あるいはその契機を作り出したことは間違いない。さらにこうした広域的な文化拡散現象は、新しい歴史の方向性を模索し始めていた、各地の地域社会において共鳴し、結果的に列島規模に多様な土器様式が錯綜する時代をカタチづくっていったと言えよう。見方を替えると広域的な情報が錯綜し、伝統性からの離脱を含めた浮遊性志向が強く生み出されつつあったことになる。一方で、第二次拡散期は、東海系のトレースのベクトルが反転する。すなわち近畿地域に向かって「東海系」が積極的

に動き出したことになる。それは新しい編年観に照らし合わせると、おおむね三世紀中ごろを中心とした時代を設定することができるようだ（赤塚 2003）。まさに破格な規模をもつ歴史的な巨大前方後円墳がヤマトに誕生しようとする時代に相当する。こうした現象の背景には、本来が伊勢湾沿岸部の部族社会がもつ矛盾が引きがねになり、個人的カリスマの登場と伝統・風俗性の強化が下地に存在すると考えている。

以上のような点を踏まえて、拙論では東海系文化を整理する過程で浮かび上がってきた古墳文化誕生のプロセスをまとめてみたい。ここで問題にしたいのは、そうした流動化した伝統的地域社会が、いかなる要因で前方後円墳や前方後方墳を採用し、造営していったのか。さらに各地の地域社会がどのような意味合いをもって、こうした墳墓を受け入れていったのかという点を考えてみたい。

「ヤマトから」という幻想

古墳文化の主要な要素やカタチは、全てヤマトから列島内に波紋のように広がって行った。ここに古墳文化の全てが存在し、この地から全てが発進されたというような幻想がある。しかしながら現在の考古学的成果からは、これらを実証する具体的な資料は残念ながらほとんど見いだしにくいといっても過言でない。つまり「ヤマト」に遅くとも三世紀中頃に誕生したとされ

る倭王権は、まさに突如、忽然とこの場所に登場するという印象が強い。彼の地の弥生社会が母体となり、その枠組みを基盤にして急速に発展していった形跡は見だし難い。では、あのヤマト東南部に残る無数の巨大古墳や遺跡はいかなるものなのであろうか。結論を最初に述べれば、この幻の王権の実体は、列島内に存在した多様な地域社会の集合体であると考えている。様々な地域社会がある歴史的な出来事性(匈奴國との抗争)を起因として「ヤマト」に集合し、そしてあらたな集合体が出来上がった。そしてその場所に、各地の地域社会が生み出したさまざまな文物が集まってきた。やがて、集合体は各種の地域性豊かな文化の中から選択性と収斂性の過程で、新たに誕生させた王権のデザインを決定して行くと考えている。

共同性の創造に向けて

二・三世紀列島内には、個性的で独自の文化がそれぞれの地域単位で一つの地域社会を形作っていた。決して様な文化が存在したのではない。間違いをおそれず言及すれば、それは民族的ともいえる違いが内包されていたと思っている。したがって拙論の前提は、多民族的な列島社会の風景を容認するところから出発する。それは都出比呂志が示した共通圏としての第1・第2地帯(北部九州から東北中部)内(都出1993)においても例外ではなく問題にしたという事である。

そしてそこに存在した多様な地域社会が、次なる新しい時代への胎動を自ら感じ取り、判断しているように思える(共鳴現象)。東海系のトレースはその方向性に一つの契機をもたらしたにすぎない。「東海系」は古くからの交易ルートに導かれて、結果的に地域社会が決断した様々な共同性の新たな創造に参画して行ったものと考えている。

以上の前提を踏まえて考えていきたい。なお、取り扱う時代はおおむね三世紀を中心とする。

2 前方後円墳というカタチ

前方後円墳について、まずその各々の要素・属性を徹底的に分解していくと、各要素が個

性を持ち始める。それまで同一視されたモノが、その時点で別な区分においても把握できるように見えてくる。例えば葺石を取り上げてみると、まず外表施設としての葺石という概念からはじまり、葺石の施工法、そのもののカタチや岩石学的な種別にいたる。施工法や種別には個々の墳墓において個性的なあり方がむしろ一般的といえよう。それはその場所に意味があり、言ってみれば地域性が表面化しているからでもある。つまり伝統性や地質学的な景観や立地条件等が深く関わってると言い換えても良いだろう。しかし逆の見方をすると、今度はモノがもつ普遍性が蘇ってくる。それはそれぞれが孤立したモノではない点にあるようだ。そして見方や切り口によって、何らかの空間的な広がりがある場合も多い。しかしながら普通、こうした個性が分析段階では把握されながらも、いつの間にか葺石という概念化された普遍性に埋没する人が多いように思われる。葺石以外の要素において同一化という方向性が存在する点は否定できない。このように前方後円墳は、なぜかはじめに一つの完成された複合体として存在し、受け止められていると思われる。なるほど全体構造として「前方後円墳」は、確かに個性があり普遍性が存在する点是否定しない。しかしながらその出現において、地域性を踏まえた多様性が内包されている限り、それは見かけ上の事である。こうした前提を確認し、強く意識しておく必要がある。結論を急ぐと、大きく見ればこの時代、墳墓の諸属性の多くは、地域性の集合であるといってもよい。

前方後円形というカタチ

そもそも前方後円形とは、弥生時代の地域型墳丘墓である「円形周溝型」から出発して変化したものである点は動かない。したがって突出部がいかなる原理で発展したかと言う問題をここでは棚上げすれば、カタチのイメージは明らかに弥生時代から踏襲されたモノである。現時点でその淵源地は、東部瀬戸内から大阪湾沿岸部周辺地域と思われる。いずれにしても前方後円墳そのもののカタチは、地域型墳丘墓の遺伝子をもつ。したがってこれに付随する様々な属性は、必然的に地域性を踏襲していると考えた

方が良い。これが前提となる。

近年の発掘調査からは、宮崎平野や千曲川流域、関東北西部などに円形原理の地域型墳丘墓が存在し、分布する点が明らかになってきた。

つまり円形原理の墳丘墓においても列島内に点在することになる（石野 2001）。前方後円墳のカタチそのものを議論するのであれば、各地の円形墳墓がどのような仕組みで存在し、展開して終焉していったのかを含めて議論すべきであろう。そしてその幾つかは、間違いなく地域社会において古墳時代へと受け継がれている。そうした視点と前提でこの時代の墳墓を考えるべきである。地域の墳墓を踏まえることなく、前方後円墳・前方後方墳というカタチから、その多くを畿内ないしは東海に直接結びつける傾向が認められる。

地域性というものは、暗々裏の内にいつのまにか消え去ってしまうものなのであろうか。そうではなく、執拗に残存することが一般的であったと思われる。

一方で、「ヤマト」発の前方後円形は存在するのか、という視点も重要だ。寺沢薫が提唱した「纏向型前方後円墳」とその政治的な拡散現象は、興味深い問題である（寺沢薫 1988・2000）。しかしながらここでは逆の考え方をしたい。すなわち纏向型前方後円墳とは円形原理を志向する地域型墳丘墓の集合にすぎないという視点である。なぜならばヤマトには、未だこれらに先行し、かつ連続する円形原理の墳丘墓を、伝統性にまで高めた地域は見られないからである。また纏向型前方後円墳の内部にはカタチにおいて多様性が存在するが、それはそのまま各小地域が所有する地域型墳丘墓そのものを表しているものである、と素直に考えるからでもある。

では、何故、円形周溝型の遺伝子をもつ前方後円形の墳墓が、列島内に普遍化したのか。それは極めて魅力的な課題である。

3 前方後円墳のデザイン

前方後円墳や前方後方墳の具体的かつ視覚的なイメージ。この分野の研究はむしろ遅れていると見てよい。本来の古墳の表面表現はほとん

どわからない。各種の布類・木製品、有機質の製品群は痕跡がほとんど確認できないからでもある。そこに描かれた色、色彩も重要な要素であるが、現状では欠損する。本来、地域には「色」があり色彩がある。地域特有の素材も重要だ。こうした墳丘のテクスチャーが視覚的な古墳の違いを明確化していた可能性が高い。しかしながら考古学はこうした視点にはほとんど無力といってもよい。古墳周辺の景観にも配慮が必要になる場合が想定できる。例えば意図的に整理された木々や草々があったかもしれない。水の流れや周囲の山々が意識されていたはずだ。このように墳丘のテクスチャーとその景観をいかに考えるかによって、一見同じように思われていた前方後円墳も、まったく異なるモノとして描き出せる可能性がある。従来の二次元法による区分や分類の限界性を認識し、墳丘を含めたその場をモデリング化する方向性を持つことが必要がある。こうした三次元化とともにパースナル的なテクスチャーの違いを研究することが重要になろう。墳丘斜面の立ち上がり方や段築、葺石の素材やその施工法によってもテクスチャーが大きく異なることになる。

つまりカタチは同じようだが、印象が異なる。重要な点は、地域に存在する固有の素材を巧みに使用したデザインがここでの視点といえよう。

技術者

前方後円墳の普遍化には技術者の存在が不可欠であることは明白である。イメージを描き、理念を謳い上げた後に、最後の仕事が技術者に委ねられる。さて、ここで不思議な落とし穴がある。考古学の論述にはいたって技術者をあえて高く評価する傾向が強い。本当にそうであろうか。銅鐸製作や鏡製作、玉作など、そこには優れた技術者の存在を前提化する傾向が支配的である。なるほどそうした優れた技術の継承が、技術体系として完成されている場合は考慮に値しよう。しかしながら本来の技術とはそのイメージが伝われば、技術者は類似するモノを作ることが可能である。ただし美術工芸作品を目指すという視点はここでは棚上げすることになるが、いずれにしても製作法はまっ

たく異なるかもしれないが、技術者の脳裏に一定のイメージができればそれで良い。見たこともないモノを作り上げることさえ可能となるはずだ。そして、こうして製作されたモノがどのように評価されてきたかと言えば、稚拙・例外という解釈で処置してきた場合が多い。

歴史的な巨大な墳墓を例外として、その多くは、大きく見れば前方後円墳のデザインも、このような不安定な技術環境下にあると考えたい。弥生時代から続く墳丘墓の延長上に位置づける立場を持つ限り、あえて詳細な技術マニュアルは必要ないし、存在しないと考える。

大きさについて

技術者たちの頭の中にイメージがわき上がる。するとそのイメージを基にしてデザインが描かれ始める。地域には「大きさ」や「カタチ」が存在すると考える。それはおおまかな「尺度」といっても良いかもしれない。これらは伝統性に沈殿する不動的なものに近い。いや繰り返される変化と言った方が正確かもしれない。いずれにしろその時代、その地域が所有する「大きさ」や「カタチ」を基礎にして、前方後円墳がデザインされたい。多くの前方後円墳の大きさは、その地域が所有する「大きさ」や「カタチ」によっておおまかに決定されるという基本的な視点をもつ。問題はその地域が所有する「大きさ」以上の規模をもつ墳墓が出現した場合というべきだろう。列島内に存在するすべての前方後円墳が、王権の基に一定の絶対的な基準と規格を基礎として「大きさ」が決定された。こうした従来の見解とは大きく異なる立場にたつ。逆に多くの場合、「大きさ」のイメージは地域の中に存在すると考えたい。その具体的な姿は弥生時代の墳丘墓(方形周溝型を含む)において明確に認められる。

4 前方後円墳論の前提とは

ここで、現在の前方後円墳論を整理しておきたい。まず都出比呂志は前方後円墳の源流が弥生時代の墳丘墓にある点を認めつつ、前方後円墳への飛躍には「死者を北枕で葬る(畿内から吉備・出雲)・三段築成・遺体の周辺に大量の

朱を撒く(神仙思想)・僻邪の観念(三角縁神獣鏡の配置・黒塚古墳)」があり、共通祭式の拡大は、墳丘規模の斉一化、長大な竪穴式石槨の採用、三角縁神獣鏡の副葬などに見ることができる。また「前方後円(後方)墳に相似形が見られ、基準尺度を共通」し、それは「各地の首長が共通した古墳祭式と築造技術を受け入れはじめたことを意味する」と考えた。ただし「各地の伝統は保持され、例えば東西頭位が九州や四国に主流となる」点も付け加える。そしてその祭式は各首長層が共通の政治秩序の中で、異なる葬送儀礼を融合し、かつそれらから超越する新しい葬送儀礼を創造する必要があったと考え、「各地にそれ以前からあった墳丘や埋葬施設の築造技術を葬送儀礼のうちいくつかの要素を採用すること。吉備や讃岐の竪穴式石槨、吉備や出雲の葺石、吉備で発達した埴輪が初期の古墳に採用された。もう一つは外来の儀礼と技術、つまり北枕の埋葬や銅鏡、朱の重視や墳丘の三段築成など。古代中国の宗教思想と墳丘構築の土木技術を新しく取り入れた。この「融合と超越」の原理により創造された祭式が前方後円墳祭式である。」こうした前提を踏まえて、「墳形と規模との二重の原理により被葬者の系譜と序列を表示する身分制のシステム」とする著名な前方後円墳体制論が展開する。(都出 2000) ここでは、特に融合と超越の原理に共感し、さらに論を進めていきたい。

次に白石太一郎は「当時の古墳は、列島各地の政治的首長たちが、彼らの構成する政治連合の構成員の死に際して共にその墓を造るといった性格がきわめて強かった」として「古墳の墳丘の規模もまた、彼ら各地の首長たちがその政治連合のなかで占めていた地位、すなわちその身分秩序と関連しているものと考えられる。おそらく祖先を共通にするといった同祖意識で結ばれ、共通のイデオロギーにもとづいた古墳を、共通の政治秩序にもとづく基準によって共に造り、共にその葬送儀礼を執り行う事によって、彼らの間の同盟関係の確認や強化がはかられた」(白石 1999)と主張する。列島内に点在する古墳のあり方を、「政治勢力の間に形成されていた首長同盟の政治秩序」との関係で理解している。そして「各地の首長たちは、ヤマ

トの王に倭国王としての外交権と海外交易の統制権を認め、最高の宗教的権威を承認することによって、自らもその権威に連なるものとして、配下の民衆に臨み、鉄資源をはじめとする先進的文物の入手システムに加わることができたのである」とそのシステムの具体的な内容に踏み込んで言及した。

広瀬和雄はその著書の中で「画一性と階層性をみせる墳墓が前方後円墳であり、前代からの伝統、技術的な限界性、中央からの距離感などに起因した地域的特殊性をもちながらも、墳丘構造や埋葬施設や副葬品の組合せに画一性をもたらしたのは、亡き首長がカミと化して共同体を守護するという共同幻想を内容とした前方後円墳祭祀であった」と主張し、「もの・人・情報の再分配システムを媒介とした、首長層の利益共同体のイデオロギー装置として前方後円墳は機能していた」と考える。つまり「一定の領域をもって、軍事・外交・イデオロギー的共通性をそなえた首長層の利益共同体が前方後円墳国家であり、そしてそれを運営していたのは終始、大和政権であった。すなわち、前方後円墳国家のメンバーシップを表象したのが前方後円墳であって、それは各地にひろがった前方後円墳連鎖として〈目で見える王権〉の役割を果たしたわけだ。」(広瀬 2003)

ヤマトという前提と同じ民族性という前提

以上のように現状の前方後円墳論には大きく2つの傾向が読み取れる。それはまず第1に何らかの共通性を保持する点を認め、前方後円墳そのものを政治的な諸関係を表示するものであると考える点である。特にその形と大きさが重要なキーワードになっているようだ。第2に偏差のある地域性を認めつつも、その中心はあくまでも「ヤマト」である点是不変である。つまり文化情報の発信は、ヤマトが全て掌握したものであるという前提の上に語られている。さらに上記の論文では明確に言及されていない重要な点がある。それはこれらの理論は列島内の多くが、基本的には同じような風俗・風習、考え方やその方向性を享受するものである、という一つの民族的土俵の上に存在するという前提がある。こうした暗々裏に認められた前提が、ほん

とうに正しいものかをまずは考えてみる必要がある。この視点を以下、最も重視したいと思う。大林太良や網野喜彦が提示した民族的視点(大林 1986・網野 1998)は未だ不透明なまといえよう。

そこで、まず共通性を保持ないし、共通性を見いだす積極的な要因について考えることにしてみたい。先に引用した代表的な論考に共通する点は、どうやら鉄資源を代表とする、特殊な文物の具体的な分配システムに重きを置くように思われる。そしてそれはすべてがヤマトに一元的に集約されるという前提がそこに存在すると思われる。はたして現在の考古学的成果がこうした点を傍証できるのか問題にしたい。なるほど畿内においても副葬品に見る圧倒的な鉄製品や鏡・石製品の所在は間違いない。しかしその所在がほんとうに彼らの独善的な保有品なのかは議論の余地がある。前期古墳から出土する品物が、すなわち彼らのだけの仕組みによって独占的に集積されたものかは問題である。むしろ、現在の詳細な属性的な分析からは、その多くは偏差に満ちた品物であるという方向性が指摘できるのではないと思われる。つまりそこに存在するものは、結果として多様な製品が集積されたものであるという視点が浮かび上がってくる。中には彼らそのものによる所有も否定はしない。しかし問題はこうした鉄製品などの製品再分配システムが、実は表面的な見掛け上の動きにすぎないものとも考えることもできる。弥生後期から古墳早期の地域社会はすべからく同一の品物を嗜好し、かつ蓄積したというのは明らかに間違いである。実質は地域による製品の選択的集積と生産にある。この執拗な地域性を一気に払拭する魔法のような思想は見当たらない。

そこで次に早期・前期古墳の代表的な副葬品を概観することにしてみたい。

5 収斂する副葬品

早期・前期古墳の副葬品の中で特に注目されるものはやはり鏡と石製品であろう。加えて鉄製品・青銅製品を概観してみよう。

まず鏡であるが、従前の予想に反して倭鏡

製作の開始がさかのぼる点や複数の系列が存在し、またその変化も多様である点が指摘されている（森下 1991）。三角縁神獣鏡の製作とほぼ同じくして初期倭鏡製作が列島のどこかで行われていた可能性は極めて高いと考えるべきであろう。ところが、倭鏡製作が一元的な生産体制の中で実施されたと考える研究者は多い。はたしてそうだろうか。ここでいう一元的な場所とは、明確な場所の推定ではなく、ぼんやりとヤマト東南部周辺といったぐらいの感覚であろうか。遅くとも三世紀中ごろには三角縁神獣鏡が市場に出回る。するとその段階で東南部に一元的な倭鏡製作体制が誕生していたことにならねばならない。しかし残念ながら現状ではヤマト地域の弥生後期から古墳早期の社会にはそうした伝統は見いだしにくい。三世紀中ごろから後葉にかけての地域社会における倭鏡の保有は、予想に反して多いと思っている。そして実は東日本にも広く拡散しているのが現実だ。そして大阪湾沿岸部や濃尾平野・北陸加賀地域などには独自の倭鏡が分布し、具体的には複数の地域社会で倭鏡制作の伝統性が生み出されていると考えたほうが良い（赤塚 2004）。ここでは倭鏡製作も例外とは考えるべきではなく、やはり地域社会が所有する多様な製作環境や製作方法を基盤にしてしだいに収斂されていくと考えるべきではなかろうか。具体的には雑多な青銅製作環境を基礎として、列島内の複数の地域社会が独自に倭鏡を製作した。初期前方後円墳などに副葬される倭鏡の存在を、すべて一元的な製作と一元的な配布システムから理解できるかはかなり難しいと思われる。列島内各所の雑多な製作環境という基盤の上に、より効率化され合理化された工房へと移り変わっていくものではなかろうか。ここにも偏差に満ちた多様なモノから収斂へという基本原理が存在すると考えたい。

次に石製品についてであるが、まずその分布を概観しても、地域的にかなりの偏在性が存在する点は明らかである。こうした点を政権の地方経営の所産とする解釈が大きな支持を得ているように思われる（川西 1988）。しかし近年は大和政権の絶対的主導を疑問視する傾向も見られ、それぞれの形が単純な変遷ではなく、さ

らにその素材においても多様性があることが指摘されている（北條 2002）。倭鏡も同じであるが、ここであらためて確認するまでもなく、基本的には石製品化は弥生時代から続く伝統工芸技術である。容器形石製品などで解釈したようにこうした品物の石製品への写しは地域性が存在する（赤塚 1999）。具体的には容器形への石製品化（写し）は、東海地域の中にその伝統性を見いだすことが必要である。そして他の腕輪類を含めても、東海から北陸地域を中心とした伝統的地域社会が作り出した工芸品であると理解した方が良い。地域から生み出された多様な工芸品が、王権およびその周辺に交換され、やがてその中からより規格化されたデザインが生み出されていく。これらの工芸品の基本的な道筋は、以下のように理解したい。

まず部族を表象するアイテムとしての地域の特産物から出発するものであり、やがて市場、交換媒体の中で選択され収斂され、より適合したカタチが志向される。するとその方向に見合うデザインが工房内で生み出され、急速に普遍化し、市場に出回ることになる。王権による独善的・特権的な方向性のみが、そこに介在するというような単線的な系列はどこにも見いだせない。ただ優れた工芸品への憧憬が王権内にも存在した事は間違いない。

鍬の形は本来、地域の部族的な要因から決定される場合が一般的である。したがってその形は多様であり、大きく見れば地域により分布に偏在性が見られる。拵えやその装飾、素材を加えるとまさに所属する集団を表象する優れた品物であり、より具体的な違い（視覚的な差違）がむしろ重要であったはずだ。副葬品にみられる鍬・剣の形や拵え、副葬法に多様性が存在するのはそのためである。銅や鉄素材はしたがって地域に存在してこそ意味があるものと理解したほうが良い。王権による一元的な巨大な工房はどこに存在するというのだろうか。そしてその技術はどこから習得したものなのだろうか。ここでも本来、こうした技術力は、弥生時代からの地域社会がそれぞれ風俗性に則して工夫し、育て上げてきた伝統的な技術である。これらの素地を踏まえた特定工房の存在は、すなわち地域社会からの技術者の集積であり、それ以外の

何者でもない。特定工房の存続性は、市場で選択され収斂された後、普遍化するデザインの登場までまたねばならない。因に、筒形銅器や巴形銅器も弥生時代からの伝統性から引き継がれたものである可能性が高いと考えており、やはり地域性を基本にした作品と受け止めている(赤塚 2004)。

こうした前提が許されるならば、初期古墳の副葬品に見られる工芸品は、その大半が弥生社会から引き継がれた伝統的地域社会が所収するモノであることになる。その素材や形はまさに多様で希少、地域性が強いモノと言えよう。こうした工芸品がより広域的に急速な交換がはじまると、効率的なデザインが必要とされ形と素材が収斂されていく。そしてそれを市場が選択したことになる。したがって多くの副葬品を無批判に威信財として受け止める方向性は認めがたい。なぜならばそうした共通意識が存在すると言う前提が存在しえないと考えるからである。弥生時代後期の段階においても地域はそれぞれ自らの意志と風俗性の許容範囲内において、素材や文物を選択し収斂してきた。全ての地域社会が同じモノを同じ程度望み、求めていたというような状況はどこにも存在しない。この時期、列島内にモノやその使用にあたっての統一的な価値観を求めることは難しいと考える。

6 共鳴性としての墳墓の形

さて、ここで今までの概要を整理しておきたい。

まず前方後円墳や前方後方墳とは、本来が弥生社会が生み出した地域型墳丘墓から出発している点を確認しておきたい。そしてその大きさや形、墳丘テクスチャーなどはすべてそれぞれの地域社会がほぼ独自に決めてきたものであり、かつ所有しているものである。どちらかというとき習俗的なとられ方を優先し、これらの属性を受け止めていきたい。そして重要な点は、地域型墳丘墓には多様な方向性が内包されているのであって、必ずしも一様ではない。そのカタチと文化に何らかの共通性を見だし、その地域社会から外に向かって力強く情報を発信し

ようと試みた地域は、この時代においては特定地域に限定できる。具体的には大阪湾沿岸部(前方後円形)と伊勢湾沿岸部(前方後方形)である。この二個所の地域社会からの文化情報を基本にして、地域を動かし、新たな伝統を築こうとする力強い意思が働いた瞬間、その形に共鳴性が生み出されると考えたい。共鳴性という言葉に含まれるコードは、厳格な政治的なイデオロギーというより、むしろ何らかの共同性に共感する感性的な集団行動に近いと言えよう。そして重要な視点は、それぞれの地域社会が未だに独自の言語と風俗・風習を保持し続けていたと考える点にある。つまり受け止め方はすべて地域社会の側にその決定権があり、情報発信者側にあるのではない。列島内が一律でかつ一様な民族的基盤を保持しえたかどうかは甚だ疑問である。むしろその逆であった可能性が高いものと推測する。多様な部族社会としての地域的まとまりが、それぞれ判断し、雑多で偏差に満ちた「古墳文化」への志向性が沸き起こる。その端緒は前述したような東海系のトレースに起因する。

すなわちヤマト発の「古墳文化」という単一の目標があつて、その合理性に賛同して、列島内の地域社会が一様に変革していったわけではないという事になる。

新たな王権が目指すモノ

邪馬台國と狗奴國との抗争とその終結を契機にして、三世紀中ごろ段階で、大阪湾沿岸部と伊勢湾沿岸部を中心としたまとまりが、新たな共同性を作り上げる動きに出る。この抗争が歴史的な出来事性を持ち、初期倭王権誕生の直接的な起因になっているであろう点は、都出比呂志や白石太一郎がすでに指摘しているところであり、拙論もその起因と言う点において一致を見る。ただ「こうした共通化への直接的な契機が、卑弥呼の死により、巨大前方後円墳の出現と古墳祭式の共通化が実現した」「つまり卑弥呼の死によって、より具体的な前方後円墳共通祭式が普遍化した。」とする都出の考え方とは共通祭式の採用が共同性の主眼であり前提である点において異なる。

具体的にはヤマト東南部の纏向の地に情報発

信基地を建設することであり、列島内に新たな中核を築くことでもある。そしてそこに新たな王権を誕生させることである。はたしのその内容がどのようなものであったのかは、纏向遺跡での具体的な発掘調査とその調査成果の報告を待つ必要がある。

新たな王権が謳う共同性に共鳴した各地域社会が、自らの判断で競ってヤマトにやって来る。その共同性の主目的は、弥生社会では果たしえなかった、大きく東西の異文化を融合させ、ぼんやりとではあるが民族的な統一を掲げることにあると考えたい。そしてそこに地域社会が培ってきた伝統的な風俗や風習、技術力が必然的に集まってくる。情報が集積し、新たな情報が発信され続ける素地を作る。こうした地域社会の伝統性を参考にして新たな王権だけが許される特権的なデザインが模索され、具体的に実施されていくと考えたい。その方向性がまた共鳴性として、新しい時代を予見させ、地域社会にインパクトを与えていく。この共鳴性の連鎖が古墳文化誕生の具体的なプロセスと考えたい。したがって古墳の形や大きさ、墳丘テクスチャー、さらには副葬品や埋葬法にいたる部分は、参集した各集合体の具体的でかつ地域性を帯びた習慣や風習から出発している。そしてやがてよりデザイン化されたモノへと収斂されていく。その素材のほとんどが、実は各地域社会が伝統的に形作ってきたさまざまな文物や伝統そのものだと言えよう。

選択性と収斂性のその過程において王権のデザインが決定されていく。はじめから複合体としての古墳祭式なるものが決まっていたわけではない。あらたな王権の志向性を基本に、紆余曲折の連鎖を古墳造営という「場」で実現しようとしていた。外来文化の享受と地域性・風俗性への執拗という矛盾が、固体性（丸山 2004）としての王権の姿でもある。そして共同体の外枠を形作っているモノの前提は、習俗などの共同性と考えておきたい（大塚 2000）。

7 連鎖

まず第1段階では王権のデザインは優れた技術力が伴う憧憬の対象となるが、同時に模倣

の対象ともなる。市場原理は新たな技術力や希少な地域社会が生み出した工芸品に集まる。古墳の形や大きさ、テクスチャーも模倣の対象の例外ではない。どのパーツを選択するか判断は、伝統的弥生社会に決定権があり、その下地には許容できる風俗性が存在するはずだ。したがって三世紀後半期の古墳とは、弥生社会からの伝統的地域社会の延長上に、歴史的な抗争という出来事性を止揚する力強い動きとメッセージ性が新たに誕生した王権から発せられ、列島内の東西をわける大きな民族的な統一を志向する理念への共鳴現象である。であるから共鳴性が生み出され、こうした共鳴性によって見掛け上とは裏腹に、偏差に満ちた多様性がはじめてから存在する。共鳴性への温度差が具体的な族長たちの墳墓の形や大きさを決定づけていくものと考えたい。そこに絶対的な階級・身分秩序が忍び寄り余地を見いだすことはできない。重要な点は、むしろ新たな王権とその仲間たちが放つ新しい時代への方向性（新出的時代性）と、弥生時代には想像できないような多様な地域社会の情報（民族性を越える）を発信していくという点にある。そしてその方向性（共同性）に共鳴した多様な地域社会が存在したという点である。彼らは習俗の範囲内においてではあるが、主体的に王権のデザインを模倣しはじめた。

前方後円墳祭式というまつりを共通する事（田中 1991）でも、ヤマトと擬制的同族関係（近藤 1998）を目指したわけでもない。ヤマト発の一様でかつセット化された古墳文化という目標があつて、その合理性に賛同して、各地域社会がただ無批判に受け入れ、変革していった、あるいは前方後円形を受け入れていった。というような従来の歴史観は、地域に所在する具体的な古墳文化からは浮かび上がってはこない。

ところで、選択性と収斂性により生み出された方向性は、本来は新たに共立されたヤマトの王権だけが許されるデザインであるはずだ。しかしながら集められた富やチカラは参集した各集合体個々のものであり、富の動員は各部族長が握っている。したがってこれを手本として各部族長の模倣の連鎖がはじまることになるが、部族長はきそって自らの存在性を主張する地域色の濃い贈答品や特産物を交換したと思われ

る。これが前期、前方後円（後方）墳に副葬された具体的な文物であると考えたい。ヤマトから単線的な単純化された絶対的分与体系などまさに幻想である。全ては「ヤマト」から発進されていくのではなく、「ヤマト」に向かって集積・集合するところからはじまる。したがって繰り返しになるが、纏向型前方後円墳の実体は、彼の地に参画した族長たちの地域型墳丘墓の集合体にすぎない。そして倭鏡をはじめ各種の武器・宝器の多くは、各地の部族長が交換した贈答品・特産物類と考える。

このような視点にたてば前方後円墳・前方後方墳はヤマトから一元的に拡散したのではなく、すでにそれ以前に普遍化していた地域型墳丘墓から、その地域が時間をかけ選択し収斂した結果にすぎないものであると考えた方がよい。そこに新たな王権が放つ強い共鳴性が存在した点は言うまでもない。さらにその選択には、弥生時代からの伝統的な地域間交流や部族間のネットワークが下地に存在する。根強い風俗性と新しい感性、その矛盾の中での偏差に満ちた個性が前方後円（後方）墳の造営であり、その形と大きさの選択性に現れている。

8 まとめにかえて

前方後円墳とは、まず弥生時代の地域型墳丘墓から出発し、浮遊化した規範と二極化（大阪湾と伊勢湾）した民族的な集合を一つの方向性として、二世紀から三世紀にかけて、大阪湾沿岸部の部族社会が辿ってきた歴史を受け継ぎ、主に西日本の地域社会に受け入れられていく。その後の狗奴國との抗争という歴史的出来事を契機に誕生した、新たな王権のデザインとして採用された。同様にして前方後方墳は主に東日本という視点で広がりをもつ。

新たな王権は、大阪湾と伊勢湾に割拠した部族集団を基軸として、列島各地に存在した伝統

的な地域社会が織りなす多様な文化を基盤にして、ある種の共同性の創造に複数の地域社会が参画したところからはじまるものと想定した。この共同性は列島内に存在する西と東という習俗的な差違を止揚し、より広域的な民族的統一を創造する事にある。

新たな王権のデザインへの憧憬が、その後の前方後円墳の形の広がりを保証したが、まずもって地域社会がもつ風俗性の許容範囲内において模倣される。それはあくまでカタチの模倣を志向する。したがってその大きさやカタチは基本的にはそれぞれの地域社会が所有する風俗性を選択基盤として採用される。そこに王権による統一的な基準を想定することは難しい。なぜならば参集した集合体の富と力の動員はすべて、各集合体の手中にあるからである。

同様に墳墓への副葬品の多くは、王権に参画しようとする地域社会間の交易品であり、部族社会が培ってきた優れた工芸品である。こうした多様な雑多な品物から、交易と市場の方向性により、選択され収斂性を経て、規格化された副葬品とその生産工房が各地で新たに誕生する。王権はその上位品に収斂し、王権だけが許されるデザインを模索するが、結果として模倣の連鎖の中で埋没し、合理化した規格品が市場に出回ることになる。そこに人的な威信は存在するだろうが、王権としての「威信材」という共通意識が内包されていたかは甚だ疑問である。

以上、前方後円（後方）墳というデザインの共鳴が、弥生時代からの地域社会を基盤にしながら、列島内に存在した各民族性を止揚させようと動いた。古墳文化創世期の状況をこのように考え、列島内には当然のように共鳴しない地域も存在した。そして古墳後期になっても、地域の独自性は残存し、この段階においても倭王権は揺れ動く複数の集合体であり、比較の上において優位性を保っているにすぎないと考えたい。

参考文献

- 赤塚次郎 1992「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号。
- 赤塚次郎 1999「容器形石製品の出現と東海」『考古学ジャーナル』no.453。
- 赤塚次郎 2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」『第5回考古科学シンポジウム発表要旨』。
- 赤塚次郎 2004「東日本からの青銅器論」『考古学フォーラム』16。
- 赤塚次郎 2004「東日本としての青銅器生産」『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』第11回東海考古学フォーラム三重大会。
- 網野善彦 1998『東と西の語る日本の歴史』講談社学術文庫。
- 石野博信 2001『邪馬台国の考古学』歴史文化ライブラリー113 吉川弘文館。
- 大塚久雄 2000『共同体の基礎理論』岩波現代文庫。
- 大林太良 1986「日本の文化領域」『風土と文化』日本民族文化大系1 小学館。
- 川西宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房。
- 近藤義郎 1998『前方後円墳の成立』岩波書店。
- 白石太一郎 1999『古墳とヤマト政権』文春新書。
- 田中 琢 1991『倭人争乱』集英社。
- 北條芳隆 2002「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』石器・石製品・骨製品9 小学館。
- 寺澤 薫 1988「縦向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ。
- 寺澤 薫 2000『王権の誕生』日本の歴02 講談社。
- 都出比呂志 1993『前方後円墳体制と民族形成』待兼山論叢第27号。
- 都出比呂志 2000『王陵の考古学』岩波新書。
- 広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川選書。
- 丸山真男 2004「原型・古層・執拗低音」『日本文化のかくれ形』岩波現代文庫。
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74巻6号。